911.56
592
911.56-N392ウ
1200500756783

聖歌隊

始

911.56
N392

聖歌隊

中野秀人著

910
179

自序

この詩集は、私の廣汎な藝術的活動の土臺石である。私の仕事の多くは踏み躙られまた散佚した。だが顧みて、この一卷の書が、その量的制限にもかゝはらず、藝術及び藝術の未來にとつて、必要缺くべからざるものである事だけは確信をもつて言ひ得る。そしてそれは同時に、人類の問題を明日に向つて包藏してゐる。

あるものは「詩」であり、あるものは既に「詩」ではない。私は、私の藝術に對する意圖を、出來るだけ忠實に表現するため、內容及びそれの有機的關聯に於てこの書を纒めた。そのためには、私にとつて愛着のある幾多の詩篇をも捨てた。かくして、私の未完成な詩が、一層未完成な體裁のもとに總括されたのである。

こゝには、年代の順もなければ、思想的發展過程の順もない。ただやみ難き鬪爭の全身があるだけである。その全身を立體的に示すことに編輯の重點が置かれた。そしてそれがまた同時に、私の讀者に對する精一杯な節操なのである。收むるところの「青白い星」「光」「聖歌隊」なる三章は、それが分たれなければならない理由を、單に形式上の便宜として持つ。ただ「聖歌隊」なる十篇の詩が、比較的「詩」の淸澄さを、また音樂への憧れを追求してゐると言へば言へるのである。

私はこの詩集から、また「詩」そのものからも、前進したいと願つてゐる。だが一番大切なものは生活であり、信條であり、決定的運命である。

六月の雨の夜記

中野秀人

聖歌隊

目次

青白い星
母……二
夢……一八
父……二六
首……三三
犬……三七
螢……四〇
七面鳥……四二
昔の先生……四四
玩具のやうな世界……五三

合歡木の花……九八
春光戯畫……一〇〇
類似者……一〇三
髭……一〇五
兄弟……一〇七
舌……一〇九
青白い星……一一一

光

星……一一九
シャンソン・ダアルジャン……一一一
愛人……一一四
水の上……一一六
曲馬團……一一八

太陽……一一一
疎林……一一三
さよなら太陽!……一一四
地平……一一六
夜あけ……一一八
地下……一二〇
結晶……一二二
闇……一二三
光……一二五

聖歌隊

雨の歌へる……一二一
噴泉の歌へる……一二四
林の歌へる……一二六

キリギリスの歌へる……一三九
流れの歌へる……一四三
夜鳴く鳥の歌へる……一四四
月の歌へる……一四六
綠の星の歌へる……一四八
波の歌へる……一五〇
聖歌隊……一五四

青白い星

母

あなたは針のやうに小さい
あなたはどうしてそんなに小さいんです
母さん、あなたを見ることが出來ない
どうしてあなたはそんなに
　見えないところにゐるんです

私は霧のなかを歩いて行く
あなたから遠い　見えない
保つものもない　支へるものもない

内から外から擴がつて來る
　闇のなかを歩いてゆく
母さん、あなたは見てゐるんですか

私の後から追ひかけて來る
それは飢ではない　寒さではない
孤獨でもない
私のなかを通り過ぎる
私をゑぐる　私をうつろにする
母さん、あなたは見てゐるんですか

母さん
あなたの母さん

あなたの母さんの母さん
あなたの母さんの母さんの母さん
私の魂の出發點を私に渡した私の母さん
あなたの種族が私で終るんです！

母さん
私の戀人は何處にゐるんです
私の子供の母さんになるはずの
私の戀人は何處にゐるんです
私を待つてゐる港は何處にあるんです
母さん、あなたは見てゐるんですか！

母さん

どんなにあなたは小さいでせう
どんなにあなたは痩せてゐるでせう
けれども母さん
何にも見えないんです
私は歩いて行くんです
あなたは闇によりかゝつて
闇の緣をつかまへて
闇のなかを覗き込んでゐるんですか！

母さん
あなたにこの闇が見えますか
この鐵柵が見えますか
鳥が影のやうに飛んでゐます

空の袋になつたところを
鐵道線路がつきさしてゐます
私はどんどん歩いて行きます
けれどもこの闇の鐵柵が見えますか
この西の國の影繪が
あなたの瞳のうへに
さかさまになつて落ちて行きますか

母さん
貴方から私を引き裂く
私の人種から私を引き裂く
その力と組合つてゐる私が見えますか
私は人の母さんを奪つたんですか

人の母さんを二つにきり裂いたんですか
私は殺人者ですか
私は死骸の上を歩いてゐるんですか
　私は殺すために
　　生れないために
　　私自身の死骸の上を歩いてゐるんですか

母さん
母さんっていふものはみんな寂しいんですか
あなた達の瞳が空に昇つて星になるんですか
細くなつて、小さくなつて
光になつて飛んで行くんですか
　無限の距離のために

無限の輝きのために
空に昇つて行くんですか

私は奇蹟のなかに坐して
奇蹟を待つてゐる
太陽のない日に
星のない夜に

母さん
空は何處にあるんですか

母さん
地上は何處にあるんですか

母さん
私をとりまいて迫つて來るものはなんですか
あのはてしなく廻轉してゐるものはなんですか
あのなんにも見えない闇はなんですか
雨でも　雪でも　霰でもない
私の上に落ちて來るものはなんですか
母さん、あなたは見てゐるんですか

母さん
石です
私のうへに石が落ちて來るんです

頭のうへに　腕のうへに
胸のうへに　脚のうへに
背中のうへに　心臓のなかに
上から
下から
後から
前から
この無限に落ちて來る
石の中心に坐つてゐるのは私ですか

私はもはや動かない
私はもはや感じない
私の中にある魂は

もはや私をこづかない
――なぜお前は
人間に生れて來たのだ――
ただあの限りなく叫んでゐる聲を聞く
石の上に石を重ねた
一番遠い石のなかから

私は横たはつてゐる
私の頭　腕　胸　脚　背中　心臓が
私の死骸のまはりに立つてゐる
「女は？」
「男は？」
「子供は？」

「動物は？」
「植物は？」
「動くものは？」
「動かないものは？」

遠い歐羅巴の寒い國や暑い國で
私の同胞が戰つてゐる
　けれども私は動かない

母さん
あなたは見てゐるんですか
私のうへを子供が歩いてゐます
私のうへを女が歩いてゐます

私のうへを男が歩いてゐます
けれども、母さん
私の子供ぢやないんです
私の女ぢやないんです
私の男ぢやないんです
あの無限無終に私を追跡するものが
私のまはりに立つてゐるのです
石になつて落ちて來るのです
私のなかから　そとから
叫んでゐるのです

母さん
あなたは聞いてゐるんですか

あなたは覺えてゐますか
土の匂を
桃の花の花瓣の數を
松の木の幹からはじけ落ちる皮を
泥を摑んで歸つて來る燕の赤い腹を

母さん
昨日はなぜ消えて行つたのですか
私の子供のときのことを覺えてゐますか
またあなたの子供のときのことを覺えてゐますか
そのときあなたは何をするつもりだつたのですか

母さん

あなたは聞いてゐるんですか？
あなたはまだそこにゐるんですか？
そこの見えないところにゐるんですか？

母さん
あなたは笑つてゐるんですか
どうしてあなたはそんなに小さいんです
あなたはなにもかも失くなしてしまつたのですか
あなたが針のやうに小さくなつて
私のなかにある私の一番深いところを射る

母さん
あなたはもはや闇の緣を去つたんですか

あなたはもはや私の最後をみとどけたんですか
あなたはもはや種族を越えた別な世界に行つたのですか
あなたのゐるところはどんなところなんです？

母さん
あなたは聞いてゐるんですか
あなたには耳がないですか
私は耳も眼も鼻もない眞理の上に坐して
落ちて行く
母さん
落ちて行くんです
　地球とともに
　　廻轉するものとともに

戰場のない闇のなかを
　生命を奪つて
　　生命を奪はれて
　　永遠に落ちて行くのです

夢

A

お前のなかに落ち込んだ
喜びは悲しみ
悲しみは喜び
お前は山
お前は谷
お前の地層のなかで人間が受胎する
けれどもお前は

お前の願ひを果さないで
海を渡つて　海の底に落ちて　そこで一匹の海星となる
お前は
お前の心臓を刻んで
時計のない時計臺をのぼつて　そこで星の姉妹となる
お前は
空の城から舞ひ降りる鳥！
お前の遠い果から　お前の未來が進んで來る

B

すつかり濡れて
重たくなつた並木をぬけて
ワルツのオーゲストラが響いて來る

甃石の上を走る最後の夢
夢よ　歸つて來い！
夢よ　お前の不幸な戰場から歸つて來い
私達は再び現實の遠い旅にのぼるのだ
私達は半球の向ふの隅に退却するのだ
私を愛さない　私の夢よ！
夢よ　歸つて來い！　私の賤劣な敗北の魂を嚙みに歸つて來い！
私の受けた刑罰の「生存」を殺しに歸つて來い！
私は和解を願ふ
私は記憶の殘らない愛を願ふ
私は愛のない無意識を願ふ
私は追放されない不可知の前身を願ふ
夢よ　歸つて來い！

雨あがりの並木に沿つて
知らない街の知らない音樂に乘つて
お前の際限のない放浪から歸つて來い！
私は地に落ちた旗のやうに
ただお前を待つてゐる
濡れて　一人になつて
お前を待つてゐる

C

お前の遠い果で
誰か口論をしてゐる
お前の遠い果で

夜汽車が走つてゐる

お前は、枯穗を飾る雛罌粟のやうに赤くなる
お前は、綠のシャツボを縫つて地球の上に落とす
お前は、白い馬のやうに俺の天蓋の上を駈けてゆく
お前は、切り取られた首に婚禮の座を投げる
お前は、お前のふり撒く聖水のなかで、土の模像となつて崩れる

お前は、かつて、地平から落ちた、月のなかから、登つて來る
お前は、無限に登つて來る
風に震へて、動搖する、波のなかから登つて來る
死んでも、死んでも、死にきれない死骸のなかから登つて來る
枝をつたつて、木の葉の群のなかから、登つて來る

絶望の緊張の、截裂く瞬間の、遠い響の、鼓動のなかから登つて來る
お前がくるりと描いた、お前の大きなコンパスの下に、世界が眠つてゐる
俺は、俺の死骸を擔いで、錆ついた門の前に立つてゐる
地球が、逆に廻轉してゐる
それは小さいものよりも
小さくなる

お前は、俺の胸に、トンネルを開ける、お前の眞黑い荷車がとまる
お前は、前から後から、迫つて來る鐵壁の上で、赤い旗を振る
お前は、雨のなかの花火だ、思ひでの死骸を地球の重心から引つぱる
お前の鐵の鎖は、お前の足首を喰ふ
お前は、初めから終りへつなぐ鐵鎖を解く
解いても、解いても、鐵の輪が鐵の輪に接吻しにやつて來る、お前の足首を喰ふ

お前は逆さまに吊される
お前の死は、お前に死の門を閉ざし、お前のシグナルは、お前を締める鐵の齒車となる
お前と、俺と、過去と、未來と、それは行きちがふ二つの列車であつた。最後の無限のなか
に、俺とお前と、お前と俺とが、二人づゝ別々に乘つてゐた。そして、記憶よりも遠い記
憶のなかで、俺達は四つの壁であつた。それは牢獄であつた。牢獄は、俺の胸に、トンネ
ルを開けて、そこで停止した。お前は、俺に會ひに來た。俺は、お前に會ひに行つた。永
遠のさよならを言ふために、お前と俺とが四人になつて、四つの壁の四隅から眞中に出て
行つた。孤獨のない、眞空のなかで、お前と俺とが、木靈となつて呼び合つた。俺達は擴
がつて、そしてまた擴がつて、空の盆地が俺の胸のなかに嵌まり込んできて、嵌まり込ん
だもののなかに俺が嵌まり込んでいつて、俺がお前の速力に乘つて、俺の胸のなかを飛び
抜けていつた。
俺は、伸びあがり、手を差しのべ
雲の裾を捉へて空の薄明を引開ける

遠い見えないところで
お前の夜汽車が
お前の停車場にはひつてゆく

父

私は、燈のない夜に坐つてゐた。
小さい星が、上から下へ、私の窓のなかを落ちていつた。

誰か歩いて來る。
私は、その歩み得る足つきから、その全身を想像する。
私は、見えない、見ることの出來ない、匿された影のなかから、その生命を想像する。
闇のなかに闇の搖籃があつて、燈のない夜に私は坐つてゐた。

誰か歩いて來る。

私は、それがあなたであることを想像する。
あなたの小さい足音、あなたの小さい瞳、あなたは笑つてゐるのかも知れない。
あなたは、また、非常に小さく、非常に瘠せ、非常に青白いのかも知れない。
あなたは、重なりあつた澤山の映像を合はせて、しかもあなたとして、そこに歩いて來る。
あなたは、小さい、溫い、透明な、心臟のある水晶體となつて近づいて來る。

誰か囁いてゐる。
そこで囁いてゐるのは誰ですか？
音のない私の耳のなかで、音を生んでゐるのは誰ですか？
——君は孤兒なんだね、僕が假のお父さんになつてあげよう。
——いやだい！　假のお父さんなんてやだ！　本當のお父さんはもつと美しいんだわ！
——そのうちに本當のお父さんが見つかるからね。
——いや、いや、本當のお父さんだつていや！　あたしの探してゐるのは、美しい、美し

い、誰も知らない花だわ！

——そしてその花は何處にあるんだね？

——その花はね、あたしの近づいてゆくところに、だれもまだ知らないところにあるの。

私は、私の耳に返事していいのですか？

私は、聞えない世界から、聞える世界に向つて叫んでいいのですか？

——美しい花を下さい！　美しい花を下さい！

——もつと待つてゐるんだよ！　安心して待つてゐるんだよ！

あの、小さい、微かな、私の思ひでのなかでの、想像の唇に、答へてゐるのは誰ですか？

私の影のそとの影に、近づいて來る、私の聲に似たところの、私の聲の持主は誰ですか？

あなたの喜びが、私の喜びに似たところの、あなたの喜びを想像することの出來る私は、誰ですか？

あなたは、何にも知らないで、眠つてゐた。

私は、あなたの知らない、あなたの恐怖の側に立つてゐた。

——父さん！　父さん！　あたしを捨てちやいやだよ！

——いゝから默つて跟いておいで。

——父さん！　父さん！　あたしを捨てちやいやだよ！

——いゝから、默つて跟いておいで。

——父さん！　父さん！　あたしは何にも悪いことしたんぢやないよ！

——いゝから、默つて跟いておいで。

——父さん！　父さん！　父さんは何にも悪いことしたんぢやないよ！

——いゝから、默つてついておいで。

——父さん！　あたしを捨てちやいやだよ！

——いゝから、默つて跟いておいで。

——父さん！　怖いよ！

私は、闇のなかの闇の揺籃に、いつでも歸つて來る私とあなたとを見る。

その一杯に詰まつたところの立體形のそとで、何があつたのですか？
あの絶えず、近づいて來る、どんな靜かなものよりも靜かな、どんな生れないものよりも生れない、なんにも「ない」ところを、「ある」やうにしてゐるのはなんですか？
私は、私のそとにあるところの小さい私とあなたとを、父と子とを、見守つてゐる。

私は、燈のない燈のなかに坐り、小さい星と共に、私の窓のなかに落ちてゆく。
あなたが近づいてゆくのは、遠い未來である。
あなたの美しい花は、あなたの戀人である。
あなたの知らないあなたの過去から、あなたの知らないあなたの父さんが、あなたに近づいてゆく。
想像することの出來ない私が、想像することの出來ないあなたに近づいてゆく。
——父さん、本當の父さん！　美しい花がみつかつたよ。
——あゝ、新しい人間が生れるのだ。

私は、私の窓を叩いてゐる、叩くものの最後の音信を聞いてゐた。そして私は、そこに坐つてゐた。

首

雨が降つてゐる
私の同心異體は何を聽いてゐるだらう
彫刻家T氏のアトリエに私の未完成な首は殘されてゐる
それはまだ素材の油土(あぶらつち)に
大きな指の跡を劃して造形の搖籠の中に半ば眠つてゐるが
地球の圓心から來る誘惑と同じやうなものが
默默としてかたまり　現實の空間に臨んでゐる
かしこに遠いT氏のアトリエに
私の別な魂は生れたばかりの柔かさで何を聽いてゐるだらう

私はかれの存在の全部を
中には鉛管をたくねたもののはひつてゐる不思議な物質を
高い廻り臺の上に載せられた土の全質量を
自分自身の血と肉のやうに愛してゐる
それどころかいま私は
むかふの存在の中により多く生きてゐるのではないか
私は考へる　ほほゑむ　口元を引締める
私は默默として語らない土であり
アトリエの上に落ちる雨の音を聞いてゐる
そして遠くに彫刻家T氏の重い足音を知る
それが私なのだ
そしていま私は手と足と胴との爲に別な私となつて
遙か達し得ない私を想ふ

私が虚無になり　遍在し　萬有の根源に到達したとき
私は完全に一塊の土であり　また一滴の雨となつて
ありとある生活の戸口に訪れるだらう
私は路傍を吹く風であり
鋭い觀照の中に愁ひを疊んだ巨人の瞳の中に生きる

雨が降つてゐる
T氏のアトリエではソファの後の黄色い引幕
それは澤山の人人の肌の香を吸ひ込んでだらりと下つてゐる
ずつと昔のギリシャ時代の瓶の蓋から洩れて來るやうな靜寂
臺の上にはロダンの腕が冷たくころがつてゐる
まだこの春以來　火を焚かれないストーブやその灰落し
セザンヌの自畫像は澤山のキャンバスに蔽はれて見えない

梁の上を鼠が駈けて行つた
私の首は交錯する陰翳の中に　山の峽にあるやうな諧調の中に
白い布を被つて默してゐる
私は雨の音についてそのアトリエにはひつて行く
そしてその白い布をとつて額となり鼻となり口となる
そこで私の風貌は五年間飛躍する
吹雪を切る鷲の翼に乘つて性と種族と習慣とを突破する
ああ　彫刻家T氏の蛾のやうな眉の下から躍り出した奇蹟
その太い指の關節と關節との間から搏つて來るぬくみ
それが土の上に土を重ねた奥深いところで生命の根をおろす
私は完全に把握され　彼の最高の理想の上に花咲く
私は彫刻家T氏がアトリエに續く廊下をどしどしと踏んで行く見えない影を
地球の圓心で感ずる

雨はほのかに煙り　どこか優しい女の寢息が
ごくこまかく方方のカーテンにリズムを送つてゐる
かうした秋の夜中に　黑いビロードのやうな沈默の中に
私の首は到達し得ない私を待つてゐる
五年間の飛躍を默想してゐる

犬

お前は暗い夜に、
ひとりで眠つてゐる。
お前はお前のなかでお前を思ひ出すことが出來ない。
お前と俺との間にあつた悲劇を、お前はどう理解したらいいのだらう？
俺は俺だが、お前はどうしたらいいのだらう？
お前と俺とが別れてしまつたらどうしたらいいのだらう？
お前と俺とが生れて來るまでに何があつたのだらう？
お前には、考へることの出來ない世界！
俺には、考へて考へ盡した世界！

だけれども、それは同じことだ！
お前が、俺を忘れてゐたやうに、俺もまた、お前を忘れてゐた。
お前が、本當のお前でなかつたやうに、俺もまた本當の俺ではなかつた。
お前が、お前の四足で暮してきたやうに、俺はまた俺の二足で暮して來た。
お前は、短い地上の束縛を持つて生れてきた。
俺は、お前を跨いで生れて來た。俺の束縛はお前の前に始まり、お前の後に終る。
お前と俺との間にからみ合つた束縛を、お前は許して呉れるかね？
お前にも俺にも知ることの出來ない地上の束縛を、お前と俺とが分つて來たことを、お前は許して呉れるかね？
いま、お前のゐるところは、お前と俺とが、はてしなく吼えてゐるところの、綠の星の降りて來るところの、風が風のなかで囁いてゐるところの、お前と俺との形態なぞはどうでもいいところの、その高まりゆくところの絶壁の、お前と俺との、より深い夢に向つてしかさめないところの、夢のなかなのだ。

かくして、お前は俺のところに歸つて來た。
お前は、俺の暗い夜に、濕つた黑い鼻を押しつける。
お前は、俺の瞳の下で眠つてゐる。

螢

眞夜中に水が泣いて言ふ
——ほたるよ　ほたるよ　灯を點しておいで！
眞夜中に水が泣いて言ふ
——ほたるよ　ほたるよ　お前が河向ふの煙突の　黑い屋根の側を通るなら　灯を點しておいで！
眞夜中に水が泣いて言ふ
——ほたるよ　ほたるよ　お前が大根畑の　鼠の墓の上を飛んでゆくなら　お前の冷たい幸福を　尻に點して飛んでおいで！
眞夜中に水が泣いて言ふ

——ほたるよ　ほたるよ　お前の尻のなかで　女の黑い髮と　男の白い腕とが　小さい燐となつて燃えてゐるなら　お前が月ほど大きかつた昔を　忘れないで飛んでおいで！
眞夜中に水が泣いて言ふ
——ほたるよ　ほたるよ　お前がお前の羽と羽との間に　お前の子供達の生れるお前の袋をさげて飛んでゆくなら　人間が　人間から盜んだ　果物や　椅子や　飛行機や　兵隊達をみんな投り込んでしまふ　眞暗い　底のない沼の上を飛んでおいで！
眞夜中に水が泣いて言ふ
——ほたるよ　ほたるよ　これは　ずつとずつと前の出來事で　これは　ずつとずつと先の出來事なのだ　しぐれ降る　六月の夜の闇に　水が水と別れたときの出來事なのだ　もしもお前が　村と村との間で　鼻緒を切らした女の兒の側を通るなら　お前の青白く縛られた光でものを言ひながら飛んでおいで！
眞夜中に水が泣いて言ふ
——ほたるよ　ほたるよ　灯を點したならお前の好きなところに飛んでおいで！

七面鳥

白よ
お前は　死の卵を　暗い納屋のなかで抱いた
お前が　私の前に來て　脚をかがめるとき
お前が　心臓から手を差延ばしたやうに　空に向つて　嘴を開くとき
私は　お前の豫告がなんであるか知らない
お前は　訪問の聖女のやうに　玄關からはひつて來る
お前は　お前の羽を赤い血に濡らした　秋の日の慘劇を思ひ出すのだらうか？
お前は　暗い納屋のなかで　私達の辛棒强い介抱に蘇つた　その返禮の意味で私に來るのだらうか？

お前は　たくさんゐる七面鳥のなかでの變人であり　鼻の長い雄に許さぬ處女の羽を　銀箭のやうに羽搏く
お前は　お前が喰つた蟲の數より多い　お前の闇の一つ一つをつゝいてきた
お前は　お前の悲劇を背負つて　死の卵を暗い納屋のなかで抱いた
お前は　お前の祕密を私に聞きに來るのだらうか？

白い七面鳥の聖女よ
私は　お前を迎へる座席もなく　お前の仲間に歸つてゆく　お前の後姿を見る
私は　椅子の上に置かれた椅子のやうに　圓筒形の世界の上で　お前の訪問に答へる

昔の先生

先生！　昔の先生！
私は深い谷を渡つて來ました
私の身體は粉だらけです
先生！　昔の先生！
私は、あなたの指先から生れた
一匹の蝶々です
先生！　昔の先生！
私の歌を聞いて下さい
「叛けよ

小さい鼠
お前のなかには象がゐる」
――私はかう歌ひます
先生！　昔の先生！
私の歌を聞いて下さい
「叛けよ
小さい乙女
お前のなかには大蛇がゐる」

先生！　昔の先生！
あなたのアトリエの窓はどうしてみんな閉つてゐるんですか？
それとも、あなたはいらつしやらないんですか？
あゝ、用心深いあなたは、私がこつそりとはひれるやうに何處か開けて置いて下さつたのだ

私は、あなたのアトリエのまはりを廻りながら、歌ひます
先生！　昔の先生！
私の歌を聞いて下さい
「叛けよ
夜の鳩も　目高も　みみずも　紙切蟲も　かなかなも　みんな叛けよ
白い花が赤い花になつて落ちるまで叛けよ」
――私はかう歌ひます
先生！　昔の先生！
私は何處からはひればいいんですか？

先生！　昔の先生！
あなたはきつと仕事で夢中なんですね？
私は、窓のカーテンの隙間から、一生懸命なかを覗いてゐます

あなたはいらつしやるんですね？
私には、あなたの白い仕事着が見えます
あなたの霜を置いた頭が見えます
あなたの屈強な指の節々が見えてきます
あなたの激しい息吹きが傳はつてきます
おゝ、あなたの匂ひで一杯なあなたのアトリエ！
先生！　昔の先生！
懐しい先生！
私の胸は喜びで一杯です
私は、あなたのアトリエのまはりを廻りながら歌ひます
先生！　昔の先生！
私の歌を聞いて下さい！
「叛けよ

ありとあらゆる小さいものよ
見えない星よりも小さいものよ
木の葉の末から　小波のなかから
起ちて太陽の門をくぐれ
光となつて飛べよ」
先生！　昔の先生！
あなたは、私の歌を聞いてゐられるんですか？

先生！　昔の先生！
私は、あなたの大きい耳を知つてゐます
先生！　昔の先生！
私は、あなたの影のなかにゐられるあなたの影を知つてゐます
先生！　昔の先生！

あなたは考へていらつしやるんですね？
私が飛んで來た深い谷よりももつと深いところで考へていらつしやるんですね？
あゝ、私の胸は喜びで一杯です
先生！　昔の先生！
懐しい先生！
私の歌を聞いて下さい
「叛けよ
叛きて　叛く日の聖歌隊に加はれよ
前から呼びて　後から呼べよ
呼びて應へる影のなかを踏めよ
上から飛んで來て　下から飛んでゆけよ
見えなくなつて　歌になつて
太陽の門をくぐれよ」

先生！　昔の先生！
あなたのいらつしやるところに私の歌はとどきませんか？

先生！　昔の先生！
あなたの心の窓はどうして開かないんですか？
先生！　昔の先生！
あなたは私を許して下さらないんですか？
あなたの指先から生れた一匹の蝶々を許して下さらないんですか？
先生！　昔の先生！
あなたは何か言つていらつしやるんですか？
え、私の身體についた粉をみんな振拂つてしまへと言つていらつしやるんですか？
あゝ、私の胸は喜びで一杯です
先生！　昔の先生！

私の歌を聞いて下さい
「叛けよ
叛きて　叛く日のために悲しみを呑めよ
悲しみに滿ちて　唇を血にて染めよ
赤くみなぎりて　野末を染めよ　足を染めよ……」
先生！　昔の先生！
私の羽は折れさうです
私の脚はもげさうです
なんにも見えないアトリエの窓に打ちつける私の眼は潰れてしまひます
先生！　昔の先生！
私はもう歌ふことが出來ません
先生！　昔の先生！
あなたは私の歌を聞いてゐられるのですか？

先生！　昔の先生！
ある日
ある朝
おゝ、懐しい先生！
もう私は歌ふことが出來ません
あなたのアトリエの窓の下に
一匹の蝶々が落ちて死んでゐたなら
それを私だと思つて下さい

玩具のやうな世界

——なんて馬鹿げた世界だらう！
——なんて玩具のやうな世界だらう！
欅の木があつて、人が腰かけてゐる。
私はひとりになつて歩いて行つた。私の後には何者かがついて來る。私は後を振向くことが
出來ないのである。彼は通行人に向つて叫んでゐた。
——おい！　退け、退け！　見世物ぢやないんだぞ！
私は、そつと、前を向いたまゝ、その男に尋ねた。
——君は誰だね？
——俺はお前をあの世に渡す者だ

——ほう、どういふ工合にして渡すかね？　俺は喰はれても死なない男だ。
——お前がいくら歩いて行つたつて、歩いて行かない方向には歩いて行つてやしない。そこでお前をあの世に渡すのだ。どうだ。お前は冒險家だ。歩いてゆくところを歩いて、歩かないところを歩くことが出來るかね？
私は暫く立停つてゐた。そして急に後を振向いた。
——なんて馬鹿げた世界だらう！
——なんて玩具のやうな世界だらう！
欅の木があつて、人が腰かけてゐる。
私はひとりになつて歩いて行つた。私の後には何者かがついて來る。見えない何者かが、にやにや笑つてゐるのが判る。
——どうだね？　氣持は
——ふん。（嫌な奴だ）
——一層のこと、戰爭にでも行くかね？

——俺は　未成年者だ！
——ほう、お前にも嘘がつけるかね？　俺が召集令でも貰つて來てやらうか？
——お前は誰だ！　何處にもゐないところをみると、海賊王か？　でなきや前司法大臣だらう！
——俺は、お前をあの世に渡すものだ。
私は、彼を何處かに撒いてしまはなければならないのである。私は、ひとりになつて、息の續く限り走つてゐた。私をとりまいて往來が走つてゐた。
曲り角のところで、竹槍で突き殺された朝鮮人が立つてゐた。それは私でもあり私でもなかつた。到るところの曲り角に私でもあり私でもないものの寫眞が貼りつけてあつた。
なぜ私が、こんなに澤山ゐなければならないのだらう！　私は群衆の數と同じだけゐる！
私は騒動の量と同じだけゐる！　私が、〇〇のやうに、出鱈目に、はてしなく擴がつてゆく！
群集が群集を押止めてゐた。一人の男が一人の男にその理由を尋ねてゐた。一人の女が一人

の女にその理由を尋ねてゐた。そして男と女と、女と男と、動くことの出來ない世界があつた。

——白いバラが赤いバラになつて落ちたんだとさ。

——いんや、赤いバラが白いバラになつて落ちたんだ！

——だつて、バラ位のことでこんな大騒ぎになることはないわ。

——さうだ。もつと大事件なんだ。

——吾々にも關係のある事件なんだ。

——それは、またどうして？

——それは判り切つてゐるぢやないか。大事件になればなるほど吾々に關係があるんだ。たとへば戰爭……

——もし、もし、戰爭があるんですか？

私は、私の上を踏んでゐる群集の下にゐた。私は、世界に向つて、「事件ぢやないんだ！　俺なんだ！」と一生懸命に叫んでゐた。けれども誰も私に耳をかすものはなかつた。誰も私

を見覺えてゐるものはなかつた。私は、私を忘れた無限の足の下で、潰れていつた。そして私の心臓だけが、夢になつた。それは生きてゐた。生きてゐて、呼んでゐた。

——母さん、母さん、欅の木があるよ！

心臓のなかの母さんが、答へて言つた。

——あゝ、そして人が腰かけてゐる。

欅の木があつて、ベンチがあつて、人が腰かけてゐる。

——なんて馬鹿々々しい世界だらう！

——なんて玩具のやうな世界だらう！

欅の木があつて、人が腰かけてゐる。

合歡木の花

あなた。
——教へて下さい。あなたの愛の祕密を！
——教へて下さい。あたしの窓の外に脱ぎ棄てられた、あなたの小さい銀の靴の祕密を！
あなたは白い階段を登つてゆく。
あたしは黑い階段を降りてゆく。
——遠いものが近いもののなかに埋沒する。
——月が地球のなかに埋沒する。
——蜂が花のなかに埋沒する。
——夢が夢のなかに埋沒する。

——なんにも見えない闇のなかで、瞳が瞳のなかに埋沒する。
あたし。あたしの瞳の梁は、赤い色に染まつた肉體と、青い色に染まつた肉體と、月光のなかを飛んでゐる白い蛾と、棺を載せた四輪車とで出來てゐる。
——あたしは知つてゐる。あたしの地層のなかに年輪を刻んでゐる樹木の祕密を！
——あたしは知つてゐる。闇ばかりしかない闇のなかで光つてゐる星の祕密を！
あなたは白い階段に白い影を落して登つてゆく。
あたしは、殘された、眞黑い、不透明な、土くれです。
あなた。
——教へて下さい。あなたの愛の祕密を！
——教へて下さい。あたしの窓の外に脱ぎ棄てられた、あなたの小さい銀の靴の祕密を！

春光戯畫

杉――遠いところが見える。黄色いのが雪だ。

桐の花――あたしはもつと準備してゐるのよ。もつと、もつと、

沈丁花――あたしの耳環はどう？　耳環をつけると眼がきれいになるんですつて。どう？

みのむし――だれだい！　うるさく騒いでゐるのは？　まだ雪が降つてゐるぢやないか。

杉――みのむしの爺奴、少し動きだして來たぞ！

沈丁花――お前さんはだれなの？

しやぼん玉――あたしはイマジネーションよ。いまお孃さんの口から生れたばかしなの。

沈丁花――お前さん、あたしの肉色の耳環に氣がついて？

しやぼん玉――あたしに一寸でも觸つて御覽、すぐに消えてしまつてやるから。あたしは

自由に飛べるのよ。自由つていふものを知つてゝ？

桐の花――いやはや、お前さん達は本當の春といふものを知らないんだ。光といふものを知らないんだわ。あたしは空に向つて手をさしのばしてゐる。あたしの指先を御覽、しつかりと握つてゐるものを御覽、あたしはそれを五月の陽の中に放つてやるの。

すみれ――何を握つてゐるの？

桐の花――蕾をさ。

すみれ――あたしは咲かないの。あたしは春が來ても悲しみのために憂欝になるの。あたしのローマンスは悲しいんですもの。あたしは去年人間の男に摘みとられたの。それから匂ひのいいレターペーパーにはさまれたの。それまではうれしくて夢中だつたの。それから半歳、美しい女の人間の所で暮したわ。その部屋の氣持のいゝこと、見せてあげたい位だつたわ。それから冬が來て、あたしはレターペーパーと一緒にストーブの中に投げ込まれたの。そのとき女の手は震へてゐたわ。涙があたしを重くしたの。あたしそれが何だかはつきり判つたわ。紙は燃えてしまつたけれど、あたしは黒くなつて女の人の手に戻つたの。それ以來

あたしは死んでゐたの。だから春が來ても、あたしはもう咲く氣になれないの。

みのむし――うるさい奴等だなあ、お前達の話があてになるものか。だが、少し暖か過ぎるぞ。

沈丁花――あたしが春の先がけをするのよ。あたしの耳環はどう？

しやぼん玉――あたしはイマジネーションよ。蜃氣樓よ。

すみれ――あたしは憂鬱を知つてゐますからね。

桐の花――もつと、もつと、もつと、もつと。

類似者

かつて「彼」といふものが動いてゐた。

頭は機械なんだよ。だから頭を發明して、君の持つて來たものをみんなそこに放り込んだらどうだね？　機械なんだ。それは必ず造ることの出來るものだ。君の親讓りの頭なんか打つちやつてしまへよ。そして新しい頭の機械を發明するのだ。君には發明だけが殘されてゐるのだ。

さういふ工合に彼の運んでゐるものは持ち重りがして來た。さういふ工合に彼の運んでゐるものは死にかゝつて來た。彼のポンプは、心の世界から、頭の世界に水を運んで行つた。心の世界のなかでは涙が降り續けてゐた。

魚が來て言ふことには、

——どうしてあなたは、私の鰭と鰭との間の心臓のところに接吻することが出來ないんですか？　どうして私は、あなたの血と骨とになることが出來ないんですか？

彼が言ふことには、

——お前は、俺の女房が簞笥の抽斗に匿してゐる三つの林檎を知つてゐるかね？　どうして俺があの三つの林檎を食ふことが出來ないのか知つてゐるかね？

彼の眼蓋は腫れあがつて、鹽漬にされた豚の瞳のやうに内側に向つて開いた。三つの林檎は三つの人間の頭になつた。さうだ、俺はあれを食ふことは出來ないんだ。物質を買ふところのお金が必要なんだ。お金に向つて差し出された手ばつかりになることが必要なんだ。

女房のはひつてゐる肋が胸を叩いて言ふことには、

——しつかりおしよ、水が溜つて來たよ。

彼の運んでゐるものは持ち重りがして來たし、歩いてゐるところは沙漠であつた。かつて心の美しいものには王座があつた。かつて王座に坐つた者の上には星が輝いた。流れて落ちた星が、王座の側に來て坐つた。そこで美しいものが生れて、世界に擴がつて行つた。差し

出された手の代りに、差し出された手があつた。魚達は喜んで喰はれるために、淺瀬の上に泳いで來た。さういふ工合に彼は、彼の背中に向つて叫ばれる聲に耳を塞いだ。さういふ工合に彼は、頭を機械で造らなければならなかつた。

父さん、父さんはルンペンって言ふものなの？——さう子供が尋ねる。

さうだよ。——さう父さんが答へる。

だから會社なんぞには行かないのね？——さう子供が尋ねる。

さうだよ。父さんは神様のやうに偉いんだよ。——さう父さんが答へる。

彼の心の世界のなかでは、涙が降り續けてゐた。氾濫した沼の上には、棧ばかりになつた障子が漂つてゐた。女房は、はひつてゐる肋の中から叫んだ。

「お前は、あたしの林檎を見つけたんだらう？」

「俺は何にも見ないよ。」

「何を見たの？」

「俺は何にも見なくなつたよ。」

彼はまたこんな工合に言つた。——女房よ、お前は俺のなかにゐるのだ。お前のお母さんも、俺のお母さんも、お前のお父さんも、俺のお父さんも、みんな俺のなかにゐるのだ。俺は過去、現在、未來、その種族を引連れてさ迷つてゐるんだよ。俺は神様に出會ふか、俺が神様になるか、それまでさ迷つてゐるのだ。俺はお前達を護つてゐるのだよ。俺は永久に戰つてゐるものの權化なのだ。

さういふ工合に彼の運んでゐるものは死にかゝつて來た。彼は會社にも、また會社に似たやうなところにも行かなかつた。

あなたは、軍艦を八艘半造ることが出來ますか？

そんなことは出來ません。

あなたは、四角い棒を嘗めたり、食つたり、眺めたり、着たり、嗅いだり、踏んだり、叩いたりすることが出來ますか？

そんなことは出來ません。

彼の周圍にあるものは、彼に出來ないことばかりであつた。

父さん、父さんには何にも出來ないの？——さう小さい瘤が尋ねる。

何にも出來ないんぢやないよ。何にもないんだよ。——さう父さんが答へる。

どうして何にもないの？——さう小さい瘤が尋ねる。

餘りしつこく聞くと、父さんは一人で何處かに行つてしまひますよ。——さう父さんが答へる。

彼の心の世界では水嵩が增しつゝあつた。女房は、あたしは水に浸つてゐるんだよ、と叫ぶ。ポンプは、ちつとも水が揚がらなくなつたよ、と叫ぶ。心臟は、早く短刀を突刺しておしまひよ、と叫ぶ。さういふ工合に、彼は何か早く機械を造らなければならないのである。けれども機械は誰が造るのだらう？

かつて「彼」といふものが動いてゐた。そして彼はそのなかで動いてゐた。

早く造れよ、機械だけぢやないか。なにをぐづぐづしてゐるんだね。林檎でも女房でも、みんなその中に放り込んでしまへよ。牛乳からチーズを造るやうに、赤い血を絞り込んで花を咲かすのだ。君、君が先頭に立つんだよ。さういふ工合に彼の運んでゐるものは持ち重り

がして來た。彼はどうしていいか判らない歳頃になつたのである。

彼の頭は膨れあがつて、てつぺんにある毛を押し落してしまつた。所在の判らないほど擴がつた心臓は、彼にも見えないし、他人にも見えなくなつた。彼はその見えない心臓の底で、人の捨てた腐れた林檎を數へてゐた。

若しも誰か私の心臓の袋に錐を刺して呉れるなら、私はどうにかなる。さういふ工合に、彼は喘いでゐる自分に向つて言ふのであつた。

けれども雨は降りやまなかつた。涙はポンプの管を押し割つて氾濫した。眼や口や足だけになつた女の死骸さへ漂つて來た。彼の瞳は内側に擴大して、彼の見る世界は二重にも三重にもなつた。

彼は、波の打つて來る海となつた水の上を眺めてゐた。さうすると人魚がその上に浮かびあがつて來て言ふことには、

――あなたは私を知つてゐますか？

彼が、我慢しきれなくなつて言ふことには、

――俺は誘惑なんぞをちつとも感じなくなつたよ。

あたしは何にもないところから生れたんですよ。――人魚は何にも考へない無邪氣な赤い唇を開いて言ふ。

何處から生れようと俺の知つたことぢやないよ。――彼は益々苛立たしく答へる。

――それでも自由がなんであるか、悲しみがなんであるか知つてみたくはありませんか？

――そんなものには飽き飽きした。

――それでも私には、あなたの涙の水をみんな飲み干してしまふことでも出來るんですよ。

「俺はいま機械を造つてゐる。」「私が若しも機械だつたら。」「若しもお前が俺の機械だつたら？」「あなたのなかで重たくなつたものを寄越しなさい。」彼のなかで重たくなつたものが泳いで來る人魚を考へてゐた。それは涙の沼のなかで美しい水煙をあげた。それは誘惑なのだらうか。奇蹟なのだらうか。彼は、誰かが匿し忘れて腐らした林檎の上をすべつてゐた。すべるたんびに、彼は人魚を、最後の女を描いた。彼は人魚に向つてかう言ひたかつたので

ある。「私の馬の皮で造つた、だぶだぶの心臓の袋を探して來て下さい。そして他人にも私にも見えるやうに錐で穴をあけて見て下さい。その穴から空を見ることが出來るなら私は滿足して死にます。」

彼は長いこと考へてゐた。彼は人魚もなんにもゐなくなつた考へのなかに坐り込んでゐた。彼は坐りながら、次第に水の底に落ちて行つた。それは死に類似してゐた。彼自身もまたなにものかに類似してゐた。私の空想は無限である。私の計畫もまた無限である。私の涙は智慧を凌駕する。彼にとつて、それはさうであるに違ひなかつたのであるけれども、歩く巨大な家のやうに、それは運動してゐる一つの有機體ではなかつた。

かくして、巨大な家のやうな、巨大な壞れた機關車のやうなものが、落ちて行つた。彼は彼の率ゐる種族に訣別を告げながら、訣別の鰭で少しばかり泳いだ。そして鰭が言ふことには、あなたが、あなたに類似してゐる限りお供します。

だから彼の女房は死にかゝつてゐるし、彼の林檎は何時までたつても食はれるやうに熟さないし、彼の軍艦は海に浮ばないし、彼のお母さんは緣によりかゝつて暗い底をみつめてゐ

るし、星は離れ離れに光つてゐるし、時間は決算帳を開けたり閉ぢたりしてゐるし、杜鵑は赤い夜のバラの接吻を待つてゐる。

若しも皆さんが世界中の水を汲み干してしまつて、その底を御覽になるならば、いまだに蠢めいてゐる、古今未曾有の不可思議な、無限に大きく歪な、怪物を發見なさるでせう。それが「彼」です。

若しもその「彼」が水を離れて、太陽の光線に當るならば、「女房よ、さう言ふものではない、子供よ、さう言ふものではない、俺を馬鹿にしたものではない」と、言つて、息を引き取るでせう。

「彼」は水の底で、嫌々ながら喰はれる魚を喰つて生きてゐます。そしてあなた方の救ひを待つてゐるのです。

髭

偉大なる畫家は、なぜ髭を生やしてゐるか？　御存じですか？

彼は街を好んで歩く畫家でありました。

彼はカッフエーや、バアーや、それから女達のゐるいろいろな場所にいつて、デッサンをしました。

彼の妻は、彼を大變愛してゐたので、彼が家に歸つて來ると、その膨れあがつたポートフォリオを開いて見せることを彼に要求するのが癖でありました。

彼女は、姙娠しました。そして臨月になりました。彼は、新しく生れてくる子供のために、職場を探さなければなりませんでした。だから、彼は毎日街を歩いてゐるのでありました。けれども、一日の終りに殘つたものは、その膨れあがつたポートフォリオだけでありま

した。

彼女の彼に對する愛情は、日に日に深まつてゆくばかりでありました。彼は、彼女を心ひそかに怖れるやうになりました。だから、そのポートフォリオを開いて見せる前に、素晴しい智慧を絞つたのでありました。

彼女は、そこに擴げられたデッサンの前に、苦しさうに膝をついて、言ひました。

――まあ、段々上手になつていらしつたわ。あなたにもお判りになるでせう。どの男を見ても女のやうに見えるわ。さうよ。藝術家にはさうしたスペシヤリティーがなくては駄目ね。

彼は、彼女の愛情の傾きかたに安心して、自分の部屋にはひつて行きました。そしてデッサンを取り出して、顏の上にある髭をみんな、消ゴムで消してしまひました。

彼女は、またある日言ひました。

――あたし外出しないから判らないけれど、近頃の男は、みんな髭を生やすやうになつたのね。

彼は、少しまごつきながら答へました。

——さうだよ、さうだよ、流行なんて恐ろしいもんだね。近頃では髭を生やさない男なんて無いと言つてもいい位だ。

彼は、新聞や雜誌に髭の生えた男の少いのを知つて、髭の生えた男の寫眞を蒐集しました。そして、それを家に持つて歸つて見せました。

彼女は、また言ひました。

——あなた、あなたも髭を生やすといいわ、きつと似合ふわよ。

彼は、それから、髭を生やしました。彼の唇のまはりに、洗つても落ちない黑い縞が竝びはじめると、彼女は手を拍つて、肩で息をしながら、喜びました。

——まあ、素的だわ、こつちを向いて御覽なさい。さうよ、モーリス・シュバリエに似たところがあるわ！

彼女は、彼のデッサンに興味を持つたのと同じ熱心さで、彼の髭に興味を持つたのでありました。彼女の想像の世界では、あらゆる種類の髭が、列をなして、魚のやうに泳ぎはじめ

てゐるのでありました。

——ねえ、あなたのお友達のAさんもKさんも、みんな髭を生やして？　どんな髭？　まあ、可笑しいわねえ。でも、あの人達はきつと似合はないことよ。

彼女は、彼女の愛の翼を擴げて、その下に全世界が匿されてゐるのを感じました。彼女は幸福でありました。彼女の夫は、職場を見つけ得ないのが玉に瑕で、繪にかけては確に天才でありました。そして彼女に捧げてゐるすべての純情！　さうした雰圍氣のなかでは、誰でも安産をするものです。彼女は、彼女の希望の夢のやうな苦痛のなかで、男の子を生みました。

彼のポートフォリオのなかでは、女のやうな男や、男のやうな女や、髭のやうな顏や、顏のやうな髭や、あらゆる種類の媚態が、滿ち溢れてゐるのでありました。そして、それは日に日に膨れあがつてゆきました。彼は彼のポートフォリオを捉へて言ひました。

——今度は、お前がお產をする番だぞ！

然し遂に、さうした日がやつて來ました。それは、彼女が、男の子の誕生祝ひに、彼の友

達をみんな呼ばうと言ひ出したからでありました。もし、世間で、髭なんてちつとも流行つてゐないといふことが、暴露したら！　彼は、そこで友達のところに行つて言ひました。

――ほんたうに濟まないけれども、今度のお祝ひには、ツケ髭をして來て呉れ給へ、これが僕の一生のお願ひなんだ。兎に角、彼女は産後なんだからね。僕は彼女を愛してゐるんだ。

彼の友達たちは、腹を抱へて笑ひましたが、いろいろに協議した後で答へました。

――君達一家の幸福のために、その未來のために、光明のために、そして君の偉大なる藝術を全世界に知らしめるために、みんなで大いに飲まう。それでは、みんなツケ髭をして行くからね。その代り、約束して呉れ給へ。君がもしも、一人の女を愛するために瞞すことが出來るならば、藝術家として全世界を瞞す決心を持たなければならないといふことを。すべての僞瞞に光榮あれ！

兄　弟

カンカンとコンコンとは土人の習慣に從つて、裸の腰の上にパパイヤの葉を縛りつけて歩いていつた。兄のカンカンは狩が上手で、弟のコンコンは釣が上手であつた。

兄のカンカンが言つた。

――お前、蛇をどう思ふ？

弟のコンコンが答へて言つた。

――僕は、長過ぎて長過ぎて仕方がないと思ふ。

それは月の美しい晩であつた。紫色の空に、果物を半分に截つて置いたやうな月が浮いてゐた。そして、その果物には皮がなかつた。それが、次第に空を辷り落ちてゆくのを、二人は殘念さうに眺めてゐた。それはやがて地面に接した。その透明で、柔かい感觸を、二人は

惜しんでゐた。

月と狐とは彼等土人にとつて神聖であつた。彼等は、月なしでは、殆ど記憶といふ記憶を呼び起すことが出來なかつた。月は、地球のなかへも落ちていつたけれども、彼等自身のなかへも落ちていつた。それは彼等自身ではどうにもならないところへ落ちていつた。そして狐は、すべての動く動物にとつての鏡の役割を果したのであつた。狐を見ると、すべての動くものは、動く自分自身を意識した。狐は共通であり、同時に、すべての動くものを差別づけた。だから土人達は狐の面を祭つた。彼等は月と狐とから離れることが出來なかつた。月と狐とのなかに、彼等の過去かまたは未來かがあつた。

カンカンとコンコンとは孤兒であつた。彼等はお互にどれ位長く孤兒であつたかを忘れてしまつたほど、お互に孤兒であつた。彼等は彼等の親達にどんなことがあつたのか知らなかつた。彼等は二人とも頑丈であつたが、カンカンは肩のところで頑丈であつたし、コンコンは腰のところで頑丈であつた。彼等は同じ一つの小屋のなかに棲んでゐた。けれども彼等は、彼等の知らない世界について語り合ふ方法を持たなかつた。彼等は、彼等同志の肉體を

越えて、絶えず變化してゆく自然、または土人達の戰爭やお祭り、さうしたものをどう理解していいか判らなかつた。したがつて彼等は、どこで生命が始まり、どこで生命が終るのか考へることが出來なかつた。彼等はいつもお互に頑丈で、それは退屈すぎる位頑丈な二人であつた。そして朝の太陽は彼等の艶のいい裸體の上で碎けた。そしてそこには、ただすべてのものが光のなかに擴がつていつた。そこにあるものは瞬間の積み重ね合はされたものであつた。カンカンにとつてコンコンは、コンコンにとつてカンカンは、それぞれ別な方向に向つて單に動いてゆくところの存在であつた。カンカンは弓矢を持つて林に行つたし、コンコンは釣竿を擔いで沼に行つた。

それは月の美しい晩であつた。カンカンの腰のまはりの葉つぱは、青黑く小さい蛇のやうに動いてゐた。そして濕りを帶びた土の上には花の種がいつぱいにこぼれてゐた。カンカンは、それを素足で踏みつけながら、月に向つて近づいて行つた。それは、月のなかから二羽の鳥が飛び立つていつたやうに思はれたからであつた。それはそこから森が擴がり、河が流れていつたやうに思はれたからであつた。けれどもそれは記憶であつた。月は果物を半分に

截つて置いたやうに、紫色の空に乘つてゐた。

カンカンはコンコンに言つた。

——俺は狩をするのが嫌になつた。

コンコンは答へて言つた。

——僕も釣をするのが嫌になつた。

そこで二人は、彼等の仕事の變化を求めて、その持場を換へることを約束したのであつた。その次の日から、カンカンは釣竿を擔いで沼に行き、コンコンは弓矢を持つて林に行つた。彼等は、彼等の新しい仕事に充分骨を折つたあげく、すつかり疲れて、彼等の小屋に歸つて來るのであつた。コンコンが、林のなかでガラガラ蛇に喰はれた日、カンカンは沼のなかを泳いでその弟を救ふために走つていつた。カンカンは、コンコンの硬直した死體を擔いで、それは夢のなかの恐怖に似た眞暗いところを通つて、酋長の家に急いでいつた。

酋長は、カンカンに言つた。

——やつぱり占ひの通りだ。お前が俺の後をつぐ時が來たのだ。

カンカンは、彼の深い悲しみと驚きとのおかげで、部落の誰よりも尊い顏付になつたのであつた。そして、酋長のあとを繼ぐ第一人者として選ばれた。彼の子孫は、次第に殖え擴がつていつた。けれども、彼が本當に棲んでゐる世界は、月の美しい晩であつた。そして、そこには花粉がこぼれてゐなければならないのであつた。さうした世界でだけ、カンカンは、彼とともに夜を分つたコンコンが、何處か遠くの方から囁いてゐるのを、感ずることが出來るのであつた。それはまた音のなくなつた夜、月のなかから、地球のなかから、木の葉のなかから、突然音が生れてくるやうに、彼の耳元に來て囁いてゐるのであつた。

——わたしは、兄さんにもわたしにも判らないやうな何かになつて、知られないところで、あなたを待つてゐるでせう。わたしの分は、まだお終ひぢやないんです。

舌

蛙の音樂を默つて聞いてゐてはいけない。誰も彼もが聞かなければならないやうな音樂には、きつと大きな祕密が匿されてゐるのです。

一匹の親蛙が、澤山の子供蛙を集めて話しました。

「私達の祖先の蛙は、お前達が恐がつてゐる蛇をあべこべに呑んでしまふくらゐ大きかつたのです。それがどうして今のやうに小さくなつてしまつたか、その歴史をいまから話しますから、よく耳をあけて、心に留めて聞きなさい。――」

さう言つて、みんなを見廻した親蛙の額からは、小さい汗の玉が滲み出して來ました。子供蛙は、田の畔に行儀よく兩手を揃へて、その話に聞き入りました。

さて、親蛙が話しだした物語は、次のやうなものであります。

「私達の祖先の祖先の大祖先の、本當の蛙には、立派な毛皮がありました。そして動物達の仲間にはひつて、聲のいいのと、頭のいいので幅を利かしました。

それは、その昔の、あるお天氣の續いた秋のことでありました。食物が澤山あつて、森のなかの動物達の世界は平和でありました。働くことにも、遊ぶことにもあきた連中は、月が空に昇りはじめる頃になると、森のなかの廣場に集つて來ました。そして獸の王樣のライオンも、あの長い房々した髯を撫でながら、みんなの樣子を面白さうに眺めました。

すると、ある夜のこと、自慢話や議論の末に、誰かが、『月はどの位大きいか?』といふ問題を持ち出しました。

その問題は、動物達には、餘り難し過ぎるので、流石智慧者の狸でさへ考へ込んで、お腹を眺めてゐるばかりでありました。やがてのこと、猿が得意さうに眼を大きくむき出して言ひました。

『かういふ問題にかけては、やつぱり私の智慧でなくてはならないのです。皆さんも御存じ

の通り、このすぐ側に池があります。一寸少しばかり身體を動かして下さい。さうすれば、月はどのくらゐ大きいかといふことを、皆さんに納得のゆくやうに寸法を計つて差しあげます。』

猿は先に立つて歩き出しました。他の者達は、半信半疑で、猿がどんなことをするのか見るためについて行きました。

池の面は、夜の空氣を吸ひ込んで、一層靜かでありました。その拭きあげたやうな面の上に、圓い月が浮いて居りました。

『ほら、あそこに月の影が乘つてゐる。あれをつかまへて寸法を計ればわけのないことさ。』

猿は、長い尻尾を岸の小枝に卷きつけて、長い腕をゴムのやうに引き延ばしました。けれども、猿の手がその月を摑まうとすると、月はその影をこはしてしまひました。そして、無數の小さい月となつて、波紋に乘つて、擴がつてゆきました。

『まあ、大體、俺の掌にはひる位の大きさだつたらう。』猿は、多少失策だとは思ひながらもさう妥協を申し込みました。他の動物達も反對するほどの理由がないので、やつぱり半信

半疑のまゝ、そこに立つて居りました。

すると、いままで池の岸に身體をひそめてゐた、私達の祖先の祖先の本當の蛙が、頭をあげました。そして凉しい聲で言ひました。

『そんな馬鹿なことがあるものか、いま月の影が流れて來て、私の足の甲を捉まへてゐるところをみると、月の大きさは、充分にこの池だけの大きさはある。』

蛙にさう言はれてみると、誰も、猿の言つたことをそのまゝ信ずるわけにいかなくなつてしまひました。みんなもとの場所に引き揚げてゆくと、樣々な議論が出て、月はどのくらゐ大きいか、話が纏らなくなつてしまひました。

すると、狼が、眼を光らせながら進み出て來ました。そして言ひました。

『俺の考へはかうだ。夜になつて月が出ると、俺達のゐる野も山も、光に照らし出されて、眞白になる。けれども、山の麓の人家にだけは燈がつくのを誰も知つてゐるだらう。それが、人間共の世界には、月がないといふ證據なのだ。だから、月の大きさは、山のてつぺんから、山の麓の人家のあるところまでの大きさだといふことになるのだ。』

さう言つて、みんなの顏を見廻した狼の額には、斷乎たる決心の色さへ浮かんでゐるのでありました。

けれども、みんなの間に挾まつて小さくなつてゐた蛙が、第一番に異議を申し立てました。

『そんな理窟は成立つものぢやない。狼さんは、人家のあるところに乘り込んで行つて、調べて來たわけぢやない。自分が人間共のなかに飛び込んで行く勇氣のないのと、月の大きさとを一緒にしたんでは、人間共の言ふ糞と味噌とを一緒にしたことになるのだ。』

それを聞くと、狼は、身體を震はせて憤りました。狼は、自分が「勇氣」がないと言はれることを我慢することが出來ません。それで、蛙に飛びかゝつて、勇氣があるかないか知らせてやらうと、牙を鳴らして身を構へました。けれども、ふだん狼と仲の惡い猪(ゐのしし)が、後から狼を抱き留めました。そして騷ぎたててゐた動物達は、一先づ靜かになりました。

『みなさん達は、どうしてさう騷々しいのですか。』いままで、默つて、木の葉の着物を着流して立つてゐた、楡が高いところから女のやうな聲を出して、みんなに呼びかけました。

『御覽なさい、こんな判り切つたことで議論するまでのことはないではありませんか。』さう言つて、楡はその袖を空にさしあげました。『ほら、月が私の袖のなかに隱れてしまひました。月の大きさはこんなものです。これなら議論の餘地はないでせう。』

動物達は、隱された月の方に眼をあげました。みんなが空を見守つてゐるときに、暗い蔭のなかから、蛙が地べたを叩いて、言ひました。

『みんな地面を見るがいい。こゝに寫つてゐるのが、楡の影だ。楡の影はこんなに小さい。それに較べて、それをとり卷いてゐる白い月の影は、果しもなく擴がつてゐる。月が楡の袖よりも小さいなんて、みんな手品さ。出鱈目のイカサマ藝當さ、そんな、すぐに檻樓の出るやうなお說敎に瞞されてたまるものか。』

他の動物達は、一齊にその地面の方を振り返りました。それは、まつたく蛙が言つたとほりでありました。動物達は、少々この難題をもて餘して、お互の顏を見較べるのでありました。すると、いままで隅の方で默つてゐた熊が、大きな膝を前の方に乘り出して來ました。熊は、早くから言ひ出したくて仕方がなかつたのですが、性分の用心深さと、羞しがりとか

ら、今まで我慢してゐたのでありました。

『この問題については、やつぱり私が證人に立たなければなりませんかね。私が親代々から受けついで來た紋章は、その實物の月を形どつたもので――』熊は、吃り吃り話しながら、その月の輪を示すために、立ちあがつて、首を突き出しました。その恰好が餘り可笑しいので、他の動物達は、みんな笑ひ出しました。そしてロ々に、『そんな光らない月は駄目だ。』『正直は馬鹿のうちだつてね。』『誰が本氣にするものか。』そんな工合に囃し立てながら、眞赤になつて憤つてゐる熊の前で、足を踏み鳴らして騒ぎました。

さつきから、超然として、學者のやうな顏をして、みんなを見下ろしてゐた狐は、王様のライオンの方に身體をすり寄せました。

『諸君！』と、彼はまるで訓示でも與へる者のやうな工合に胸を張り出しました。『諸君達の議論は、大概それで盡きたことと思ひます。王様も、大變お慰みになつたことと想察します。そこで今晩は、その問題はこのくらゐのところで打切りたいと思ひます。なぜならばこれより以上論じあつても、結局同じことだからであります。月の大きさは、その光にあるの

であつて、それは到底計ることの出來ないものであります。それは丁度、王様の勇氣を計ることが出來ないのと同じことであります。强くて立派なもの。たとへば、王様の勇氣がどのくらゐ大きいかといふことを、誰が計ることが出來ませうか。――』狐は、さう言ひきつて王様をかへり見ました。

追從の好きなライオンは、狐の言葉を聞くと、眼を細くして鷹揚にうなづきました。

『けれども』と、暗い蔭のなかから小さい聲が、異議をさし挾みました。『けれども、王様の勇氣がどのくらゐ小さいかといふことも、また、誰が計り知ることが出來ませうか。』さう大膽に言つたのは、私達の祖先の、祖先の、大蛙だつたのであります。

それと同時に、王様の眼が大きく開いて、鬣が逆さまに立ちあがりました。『無禮者！前に出ろ！』その怒號が破れる鐘のやうに響き渡りました。そして、その聲の下から、狐が何か合圖をしました。さうすると、いままで蛙にやり込められてゐた連中が、蛙を引きずりだしました。他の動物達も一緒になつて、蛙を取り圍んで、嚙みついたり、引裂いたりしました。そして、蛙はたうとう形のない死骸になつて横たはりました。

けれども不思議なことには、その舌だけはどうしても死にませんでした。聲の出ない舌が、まるでなにごとかを爭ひ續けてゐるかのやうに、左右に跳ね上りました。それを見てゐた動物達は、次第に氣味が惡くなつて來ました。そして、このまゝ捨てゝ置くのは緣起が惡いといふことに一決して、そのなかの選ばれたひとりが、その舌を根元から嚙み切つて、川に持つて行つて捨てました。」

そこまで話し續けてきた親蛙は、額の汗を片手でこすり落しました。そして、その話に聞き入つてゐる子供蛙達に向つて、更に聲を改めて申しました。

「それから私達の歷史が始まつたのです。その死なない舌は、どうにかして昔の姿に歸りたいと思つて川のなかを流れ續けました。そのうちに、その舌から、手や足や、頭さへ生えて來ましたけれども、昔のやうな大きさにも、毛皮に包まれた身體にもなることが出來ませんでした。だから冬が來ると、土の下に隱れてゐなければならないのです。これが現在の私達蛙の始まりです。——」

「だから、お前達は私の話したことをよく記憶して、心の底に留めて置きなさい。そして、

お前達はこれから決して本當のことを言つてはなりません。なぜなら、そのために私達はこんなに小さくなつたのだから。それからまた、お前達は決して嘘をついてはなりません。なぜなら、私達は、その舌の努力と苦しみとから生れて來たのだから。そして、私達は動物の世界である山と、人間のゐる村との間をとりまいて、私達の追憶と祈願の歌を唱ひ續けるのです。」

さう言ひ終つてから、親蛙は自分自身に說明するやうに、「私達の苦惱の大きさが、月の大きさになるのだ。」と、つけ加へました。そして、子供蛙と一緒に足を揃へて、淺い田の水のなかに水音を立てゝ飛び込んでゆきました。

青白い星

去年の雪が遠くなり、野の罌粟の花が遠くなり、小さくなつた空が遠くなる。私は横たはつて、地層を溶き、地層を遡る。

土のなかの一番暗いところで、一番手近いところで、見えなくなつた私を心配してゐるのは、私の父さんと母さんとである。

父の語れる。

――お前の父は墓場からあがつて來て、も一ぺん足に鎖をかけて、お前の前を歩かなければならないのだらうか？　お前はお前のなかにないものを、お前にしようと思つてあがいてゐるのだ。お前は眞暗い洞穴のなかに降りていつて、何にも獲物のないところに網をかけて

ゐる蜘蛛のやうなものだ。お前のかけた網がお前の世界だ。お前はゆすぶつたつて、もがいたつて、お前の世界に引懸つてゐる。もしも私がお前を自由にするなら、私は簑蟲(みのむし)のやうに小さくなつて、お前の網に吊されるよ。

母の語れる。

――お前はひとりぼっちだね。お前は孤獨さへ、まだ孤獨でありきれないと思つて逃げ廻つてゐるのだ。一體孤獨は何處にあるのだね。海の水はいくら逃げて廻つたつてやつぱり海の水だ。お前は自分の瞳をえぐり出して見える世界から孤獨になることは出來ない。お前は生きてゐるのだ。まだ生きてゐて、生きてゐないものと同じやうに、孤獨を失つてしまふのだ。お前は何處にもゐなくて、何處にでもゐるもののやうに叫んでゐるのだ。お前が生れて最初に踏んだ土の下に私達はゐた。私達が孤獨なのだ。私達がお前のために空に吊されるよ。

けれどもお待ちなさい。あなた達の岩を割るのは私です。地球の重心を打ち拔くのは私で

す。私の生れるのは春、月は五月です。私は掌のなかに青白い星を握つてゐる。

光

星

あなたは
高い落ちないところで光つてゐる
あなたの射散らす
銀の針は登ることが出來ない
「私のゐる下界は
うんざりしますよ」
「あなたのことを考へるのは
時代遲れだつて
心ない青年が言ひました」

あなたは
やつぱり下界のことを思ひ出して
雲の床を拂つて
一生懸命で銀の網を投げてゐる
「あなたには申譯ないんですが
やつぱり蠢いてゐるんです」
「どうして生きてゐるかつて？
私の肉身が
私を憐れんで
私に銅貨を分けて與れます」

あなた達は

空の眞中で
清い愛情の輪を造つて
對等なものの間で話し合つてゐる
「私達は騙し合つて
　袋道のなかで先を爭つてゐます」
「私達は開かない奇蹟の花を握つて
　誰が一番辛棒するかを
　誇り合つてゐます」

あなたの瞳が
眞上に來て
どつちに動いても
詰問する光の言葉を投げおろす

「私は決して
　自分を辯護しません」
「登つても登つても
　とどかないので
　冷たい銅貨を握つてゐるのです」

あなたは
絶望を知らない一番高いところから
絶望の谷に光を投げる
あなたの呼び聲で眞夜中が一杯になる
「私はこゝにゐて
　どうしていいか判らないのです」
「私は立ちあがつて

四足を伸ばして
通じない動物の言葉を
空に投げあげます」

あなたは
拭ひあげた夜の空で
孤獨がどんなものであるか
盡きないものがどんなものであるか
遠い光の源から合圖する

シャンソン・ダアルジャン

あたしは短い腹を持つてゐる
足も短かし　首も短かし
胸でさへ　心臓の庫でさへ短いのよ
それでも身の丈は五尺六寸
身體の繼目の何處かしらに
きつと度外れて長いところが匿されてゐるのよ

あたしの見るもの金ばかり
あなたの唇は赤い　あたしの唇は青い

あたしは長い腹を持つてゐる
足も長いし　首も長い
胸でさへ　心臓の庫でさへ長いのよ
それでも身の丈は五尺一寸
身體の繼目の何處かしらに
きつと度外れて短いところが匿されてゐるのよ

あたしの探すもの金ばかり
あなたの唇は青い　あたしの唇は赤い

あたしに戀の話をするくらゐなら
梟に太陽の話をした方がましよ

あたしの見るもの金ばかり
あたしの探すもの金ばかり

愛人

彼女の笑ひ聲は
銀のサモワルが沸(たぎ)るやうだつた。

彼女の笑ひ聲が
私の追憶を岩のやうに強く壓へ付けてゐる
追憶よ！　飛べ！　ずつと遙かな原始にまで跳ね返せ！
彼女の手、頰、不思議な魅力をもつて動搖する肩、
みんな嵐の中のシプレスのやうにまつしぐらに踊れ！　吼えろ！

彼女の笑ひ聲は
火を落した竈のやうに冷たく
どこを向いても悲しい私の心の砦(とりで)だ。

彼女の柔かい手、汗ばんだ手
それが私の腦脊髓の中樞を下降して行く。

水の上

雪のあとの水かさで職人が二人　布をさらしてゐる
布をさらすのが商賣だ
一人の股は水に映り　一人の股は水に映らない
これを遠景に見れば　木を組んだ櫓の上でへんぽんと飜る旗の山だ

流れにつき出した足場の板は黑く濕つてゐる
どこかの土手で捨てた黃色い花が流れて來る
それが布をさらす職人の竿をよけて流れて行く
橋の上の通行人は遠くなり　別れて歸る友達のやうに　風景を後向きにする

雪のあとの水かさで職人が二人　布をさらしてゐる
布は竿の先をくはへて、蛇のやうに泳ぎ
一人の股は水に映り　一人の股は水に映らない
これを遠景に見れば　泳いでも泳いでも　うすら寒い夕暮のなかの墨繪だ

曲馬團

曲馬團の
風のやうにはためく音樂を
今晩は聞かないね

太陽の子供——仔象の皮膚を
冷たい夜氣が撫でてゐたね
一本の藁で叩くさへいたいたしげだつたね
だが表看板に鐵の鎖で足をしばられた
あの大象が吠えた聲はすさまじかつたね

俺は鞭のやうな鼻の先から
青い霜の飛び散つたのを見たよ
青い火だつて！
あゝ　それから
君はあの女騎手が歌つた
淫猥な唄を覺えてゐるといふんだね
そしてまた消化不良で白い舌を出してゐた
一匹の熊が一層可哀さうだつたといふんだね
だが
あの土だよ、馬がくるくると廻つた蹄跡の土だよ
それから鼠色の素晴らしい大風呂敷だよ
異國的な感じでぱたぱたといつた天幕の大風呂敷だよ
はゐてしまつて、黑土の上に坐して

あのばたばたを聞いて見給へ
それがどんなものであるか

曲馬團の
風のやうにはためく音樂を
今晩は聞かないね

太陽

秋から冬にかけての
氷柱のやうに光る太陽
短いスカートのやうに
跨いで行つてすぐに見えなくなる太陽
果實や落葉を
絹の網に入れて擔いで行く太陽
戀人を持つた未亡人のやうな太陽
私は太陽に背中を向けて
長い影を落して歩いてゆく

疎　林

光から遠ざかり
眞夜中に目をさます
雨の中を犬の駈けて行く足音がする
首輪がぶるぶるつと水を切る
「また、雨が降るわね、近いうちに」
さう言つてゐた女の唇を思ひ出す
林が鳴つてゐる、笹の原つぱを霧が走つてゐる
風だ、あしたは晴だ　雨は降らない
たつた一輪のコスモスが氷柱のやうに光つてゐた

あの小道、また黄色い陽がテープのやうにからみ合ふだらう
だがもう雨は降らない
「雨が降るわね」嘘だ！
見えない薄明りのなかで
疎林がきーきーきーと明日の晴を呼んでゐる

さよなら　太陽！

男のエスプリと
女のエスプリ
私達はめぐり合ふ

男のエスプリと
女のエスプリ
私達は行きちがふ

男のエスプリと

女のエスプリ
私達はそのエスプリに歸る

私達の雲雀は記憶の筬(おさ)である
さよなら、太陽！

私達は空の一番高いところから飛び降りる
さよなら、太陽！

地　平

はてに來て
はてのはてに來て
大聲で呼んでみる
——みんなおしまひになつたぞ！
やつぱりはてなのだ
どこからも
木靈さへ響いて來ない
——みんなおしまひになつたぞ！
このはてのはての

はての上が地平線だ
大手を擴げても
駈けだしてみても
おしまひになつてしまつた一線
伸びあがつて
見おろして
どこにも落ちて行かない
このとてつもないところが地平だ
——地平線が見つかつたぞ！
私は　ふりかへつて　ふりかへつて
その一線を駈けてゆく

夜あけ

きらきら光つて
夜があける
雲も　風も　霜も
過ぎてゆく夜を包んだ衣裳だ
衣裳の裾のなかで
子供や　小さいものが
眠つてゐる
黄色い木の葉が落ちて
石のベッドがすつかり匿れて

空が土の上に寢に來る
この長い幸福の夜のあけるとき
瞬く蠟燭を持つて
太陽が飛んで行く
きらきら光つて
夜があける

地下

地下に降りて行つて
頭の上の穴に蓋をする
——あいつは死んだ
——あいつは居なくなつた
みんなが忘れてしまつた頃に
地上に霜が降りて　氷雨がふつて　雪になる
横たはつて　土になつて
地層のなかを遡る
かつて踏んだ雪と

いま私の頭上　微かにふつてゐる雪との間に
世紀が横たはる
雪どけの日に
死者の體溫を思ふなら
ぬかつた道の上で
隣人に挨拶するがいい
——あいつは死んだ
——あいつは居なくなつた

結晶

まばらになつた枝のなかで
木の葉の色を吸ひ込んで
木の實が結晶する
それは次第に大きくなつて
冷たくなつて
いたるところで房となる
私は冬の霜に染まつて
私自身を結晶させる

闇

同じところを歩いてゐる
遠い薄明りだ
立ちどまつて
考へてゐると方角が判らなくなる
歩いてゐると
地面が高くなつて空をかくす
闇のなかの起伏
同じところを歩いてゐる
方角のないところで

空のなくなつたところで
黑い月が黑い地球に埋沒したところで
私は
闇になつて
擴がつて
光に向つて
滲んでゆく

光

私は、越えることの出來ない人間の制約を越えた。私は、私が何處にゐるかを發見しなければならない。私は、私を豫言しなければならない。

私は、閉め出されてゐるし、また閉め込まれてゐる。私は、戻ることが出來ない。戻ることの出來ない私は、私を破壞させる私以外の力に私を委せなければならない。

私のなかにひそんでゐる、もがいてゐる、反抗する、逃げ廻つてゐる、もつとも理解することの出來ない獸が日々に大きくなる。その獸は大きくなればなるほど、自分自身の大きさに恐れて、より一層、ひそんで、もがいて、反抗して、逃げ廻つて、より理解することの出來ない獸になつて日々に大きくなる。私がその獸を意識すればするほど、その獸は大きくな

る。その獸はほとんど盡きることのない食慾をもつて、私のすべてを喰ひはじめる。私の星を、太陽を、月を、山脈を、海を、女を、子供を、花環を、たちまちの間に喰ひ盡してしまふ。

——一體お前は何だ！

——俺はお前を喰ふ獸だ。

——なぜ俺を喰ふのだ？

——悲しいからだ。

——なぜ悲しいのだ？

——理解しないから。

——なぜ理解しないのだ？

——喰ふからだ。一番小さい見えないアミーバから象に到るまで、喰ふから理解しないのだ。理解しないすべてのものを喰ふために、俺は悲しいのだ。

彼は、私の絶望をすら喰ふために待つてゐる。私は一つの膨脹する機械になり、膨脹のす

べてを喰はれる私になる。獸の口が空を喞へる。それはまたたく間に星を呑みはじめる。私は瞳をつぶる。闇が大きくなる。それは暗さをもとどかない暗さになる。それは外に擴がつていつて、外から擴がつて來る。獸の口が益々大きくなる。それは闇になる。

誰か戸を叩いてゐる。

誰か近づいて來る。

もう長いこと膨脹が浸潤してゐる。

——お前は事件を持つて來たのか？

——愛。

——お前は事件を持つて來たのか？

——未來にある革命。

——獸に食はれてしまへ！

——誰が？

——誰も彼も食はれてしまへ！

誰か泣いてゐる。誰か長いことすゝり泣いてゐる。長い長い未解決が未解決に向つて膨脹してゐる。

——お前は何を持つて來たのか？

——何にも持つてゐない。

——お前は何を持つて來たのか？

——何にも持つてゐない。

——そんなら行つてしまへ！

——行くところがない。

——お前は誰だ？

——誰でもない。

——お前は俺に用事があるのか？

——用事を知らない。

獸が待つてゐる。私はより喰はれる私になるために膨脹しなければならない。私はなんに

もないところに向つて進んで行く。なんにもないところであることを冒險しはじめる。私は婚禮の床をのべて、山高帽を冠つて待つてゐる。誰か戸を叩いてゐる。

私は、戸に激突した。私は、私の記憶の外にある奈落の底に、私の死骸を擔いで落ちていつた。私は、私を破壞する鶴嘴を擔いで、私が破壞した私の死骸の上に立つてゐた。

聖歌隊

雨の歌へる

—私の來るところは暗い。
—私の來るところは高い。
—私の達するところは深く遠い。
—私は空砲、桐の紫筒狀の花を打つ。
—私は悲しみの谷に來る。そこに白い十字架を建てて、十字架の上に降る雨になる。覺めても寢ても、雨になつて落ちる。
—私は洪水のなかに小さい箱船を浮べて、私の夢を漂はせる。
—私は宵の口に曇り、闇のなかで明るくなる。私達は私達の法を守る。私達は「愛」の死の葬式の列に、青ざめた喪服をつける。

—私は夜に日を次いで、見知らぬ路次に落ちる。赤い板の段々を踏んで、別れに接吻するとき、「さよなら」「さよなら」、瞬間がきれて、すべてのものが動かなくなる。結んで離れないものが訣別になる。
—私は魚族の思ひでのなかを旅して、空に擴がり、孤獨を呼び集め、遠い峰と遠い波との間で歌ふ。
—私が光になつて、消えるときは、前もなく、後もなく、方角もなく、ありとあらゆる最高の喜びが合唱する。
—私の歸つてゆくところは暗い。
—私の歸つてゆくところは高い。
—私の達するところは深く遠い。

噴泉の歌へる

あたし達は涙です
——あなたは右から登りなさい、あたしは左から登る。
——初まりが終りになつたところで、終りが初まりになつたところで、
あたし達は接吻する
——あなたは高いところから呼びなさい、あたしは低いところから呼ぶ。
——登り盡して降り盡して、なんにもないところで、
あたし達は戀する
——あなたは左から登りなさい、あたしは右から登る。
——悲しみが青い空になつたところで、憂ひが白い雲になつたところで、

あたし達は歌ふ
——あなたは低いところから呼びなさい、あたしは高いところから呼ぶ。
——別なものが同じものになつて、同じものが別なものになつたところで、
あたし達は涙です

林の歌へる

銀の雨降るなかを
金の雨降るなかを
あたし達は頬を脹らまし　脹らまし
片頬にて　接吻を渡し　渡し　土のなかへ　なかへと踏む
あたし達林の家族は　みんな　土を踏み　踏み歌ふ
一番小さい裸木を抱いてゐる一番大きい裸木が言ふことには
――みんな踏み　踏み　命の嵐を　土に植ゑ　土にこめ　土のなかで祝ふ
あたし達は右に揺れ

あたし達は左に揺れ
あたし達は　登り　登り
横を向き　前を向き　重なり　重なり合ふ數を數へ合はせる
あたし達は　みんな靴をぬぎ
あたし達は　みんな裸になり
あたし達は　あたし達の知らないあたし達のなかから歌ふ
風があたし達の上を飛び越し　あたし達を包み　あたし達を運んでゆく
あたし達は　風の底で　風に戯れ　風に揺られ　揺られながら風の歌を歌ふ

銀の雨降るなかを
金の雨降るなかを
あたし達は　光を投げ　闇を投げ
頭の　簪を　傾け　傾け　空の窓から降りて來る

あたし達林の家族は　みんな同じところに降りてきて　土着の歌を歌ふ
あたし達は　虹のなかから虹を呼び　裸の未來を裸で歌ふ
——みんな並び　並び　聲を合せて林の歌を歌ふ　あなたの歌を歌ふ

キリギリスの歌へる

あたしは
あたしのなかで葉の繁る闇である
遠い地球の裏では　嵐が起り　百千のキリギリスが死んでゆくといふとき　あたしはあなた
の歌を歌ふ

あなたの來るのは遲い
だが　あなたの來るのは速い
あなたが　あたしの戀人であつたとき　あたしは薔薇の花を開き龍膽(りんだう)の匂ひを嗅いだ
あなたが　あたしの戀人であつたとき　あたしは　遲い時間の夢のなかで　あなたの瞳に

接吻(くちづ)けた
あなたの來るのは遲過ぎる
だが　あなたの來るのは速過ぎる
あなたは　眞夜中に　過ぎ去るものの裾を引いて　あたしの戸を叩いた
あなたは　月が記憶を與へるところ　影のなかに匿れて　影のなかで匂つてゐた
あなたと　あたしの仲を割いたのは　あなたでもなければ　あたしでもない
あなたの來るのは遲い
だが　あなたの來るのは速い
なにもかも　過ぎ越す彼方　あたし達の夜明けは　雨と霧のなかで震へてゐた
空は　大根の葉裏のやうに白く　そのなかを黑い烏が飛んでいつた
あたし達は　鷄舍(とや)に吊された鮑の殼の鳴るのを聞いた
あたしは

あたしのなかで葉の繁る闇である
あたしは　月のない夜の紺色の　雨より暗い　暗い地球の自轉の腹から歌ふ
あたしは　誰も彼もの胸のなかに棲むといふキリギリスの歌を歌ふ

流れの歌へる

あたしは　麥の穗を啣へる
あたしは　菜の花を心臟に挿す
あたしは　あたしを憎み　あたしを容れなかつた世界の　まつただなかを流れる
流れは　遠く　伸びあがり　光あるところ　あなたの水門を叩く
流れは　流れを飲む階段の　空に開く窓に　髮の毛を結んで懸ける乙女を見る
流れは　髮の毛を數へ　暗いトンネルのなかに落ちてゆき　地球の外に落ちる
あたしは　あなたの情熱の黑い墨の上を流れる
あたしは　太陽と稻妻の沈む果てを流れる
流れは　夢ひとつなる空に　綠の枝を翳して流れる

あたしは　嵐を呼んで流れる

夜鳴く鳥の歌へる

夜鳴く鳥は
寒いから鳴くのではない
夜鳴く鳥は
夜鳴く鳥の　影を裂き　裂き　鳴く
夜鳴く鳥は
夜鳴く鳥の　羽を擴げ　羽を疊み　羽のなかを飛んでゆく
夜鳴く鳥は
夜鳴く鳥の　心臓のなかを飛んでゆく　赤い血の糸となつて　月のなかを飛んでゆく
夜鳴く鳥は

寒いから鳴くのではない
夜鳴く鳥は
霜夜の水晶の庫のなかで　影になり　影を裂き　青い光の窓から　飛び去り　飛び去り
鳴く

月の歌へる

あたしは白き門に倚りて歌ふ
——もしも　これが　この世の愛であるならば
あたしは涙の池のなかで　白くなり　光になり　溜息となつて　見えないあなたの額に　接吻ける
あたしは　あなたの呼聲に寄り添ひて歌ふ
——もしも　これが　この世の愛であるならば
あたしは井のなかに落ち　井のなかを滿たし　はてない夜の穹窿に向つて手を差し延べる
あたしは　生命の桶から　扱みあげられる　血の滴りを聞きて歌ふ
——もしも　これが　この世の愛であるならば

あたしは　羽を擴げた彗星のやうに　波を呼び　光を集め　あなたの胸にいつさんに走つて
ゆく
あたしは　あなたの怖れを抱きて歌ふ
——もしも　これが　この世の愛であるならば
あたしは　青白い　研ぎ澄まされた　平たい　丸い　鉈となつて　あなたの影の上に落ちて
ゆく
あたしは　井のなかに落ちた花びらを　あたしの胸に縫ひつけて歌ふ
——もしも　これが　この世の愛であるならば
あたしは白き門に倚りて歌ふ

緑の星の歌へる

家疎なるあたり
緑の岡傾くあたり
夕暮の風に乘つてゐる　あなたの星！
梨の花は白く　白きが下に　大地は黄色い地肌を擴げる
乳房から　白い液體を飲んだ仔牛の夢や　柳の蔭の人聲に落ちてゆく　あなたの星！
新緑　五月の夜の驚異を　緑の沼の　緑の影に囁く　あなたの星！
緑の星の　緑なす光に戯れて　疲れまどろむ若葉に歌ふ　あなたの星！
あなたの生れた月　あなたの生れた日　クローバーの葉開き　葉閉ざせる夜　あたしは尾を
　引いて羽搏き　新しい生命の恐怖のなかを飛んだ

あなたの誕生は　あなたへの反逆　戀人は戀人に叛き　友は友に叛き　その日より　星座を
　離れたあなたの星！
喪失を生み　喪失に生き　別れ別れに飛んでゆく　その日より　あなたの地球に身を寄せた
　あなたの星！
菜の花の黄色きは遠く　光薄れて　漂ひ疲れし　あなたの星！
あなたは　涙の河を渡つていつた！
その日より　あたしの歌は　喪失の歌！
家疎なるあたり
緑の岡傾くあたり
夕暮の風に乘つてゐる　あなたの星！
あなたの生れた月　あなたの生れた日　あたしは思ひで遠く　空の星座に歸つて　失へるも
　のに合圖する

波の歌へる

あたし達は
流れ　そして走る
あたし達は　緣の缺けた硝子の壜を拾ひ　壜のなかにはひり　壜の內と外から冷たく苦い短
　刀を呑む
あたし達は
投げ出し　そして委せる
あたし達は　舞ひさがり　舞ひあがり　お母さんが赤ん坊を抱いてゐる　星あかりの窓に忍
　んでゆく
あたし達は　伸びあがり　高まり　梯子になり　內から照らされ　底のない底のうへに空を

　敷く
あたし達は　深くて　とどかないもののなかに　ぎつしり詰まり　押し合ひ　囁き　裸の星
　が　裸の心臟のなかを泳いでゆくのを見る
あたし達が透明になつて　透明のなかからあたし達が　あたし達の波をさし上げる
あたし達は　あたし達を忘れて　合唱する——そら來た　波が來た　なんでもかんでも持つ
　て　波が來た　波の花　波の鳥　波の夢　そら來た　波！
あたし達は　海藻のなかから拔け出し　眞白い素裸となつて　重なり重なり合ふものの輪と
　なつて　虹となつて踊る
あたし達は　あたし達の波を胴あげにして　果てない果てのないところへ落ちてゆく
あたし達は　あたし達の唇を　あたし達の唇に押しつける
——愛する　愛するひと　瞳の　瞳のなかに住んでゐる　愛する　愛するひと　あたしの世
　界　あたしを破壞し　あたしを創造するひと！
あたし達は

空を呑み　遠ざかり　うねり　ほのかに暗いところで歌つてゐる
あたし達は　あたし達の失へるもののうへに　渦を卷き　水尾をひき　跪き　水沫（しぶき）の白い布
を被せる
あたし達は　金色に光り　銀色に光り　黒い喪服に濡れて　見えなくなつて　水死人の棺を
運んでゆく
あたし達は　狹い門の前で　ほのかに暗いところで歌つてゐる
——どうして　どうして　死んだの？　どうして　どうしてあたし達のなかに飛び込んで來
たの？　どうして　どうして　記憶は蘇り　死の門の彼方から歌つてゐるの？
あたし達は　お母さんが赤ん坊を抱いてゐる　白い蠟人形と共に　影のなかに寫る影のまは
りを泳ぎ泳ぎ　沈んでゆく
あたし達は　死を數へ　そして生を數へ　あたし達の波を追つて　ある日　ある夜　目覺め
ない　水のなかから　蝶々のやうに群れて出る
あたし達は　あたし達の上へ上へと高まつてゆく波に乘つて　波の蔭から　波を呼ぶ

あたし達は　ゆき盡し　斷崖の下に集り　濡れて重たくなり　涙の谷に落ちてゆく
あたし達は　一杯になり　動けなくなり　その刹那に手をさしあげて　陸を呼ぶ
あたし達は　瞬間に合ひ瞬間に別れる悲しみのなかから　戀人を呼ぶ
——愛する　愛する陸！　海のなかに落ちて　海のなかから歌ふ　あなたの愛する　愛する
海！　あなたの面影のなかに落ちてゆくあなたの歌！　あなたの愛する海の歌！
あたし達は　もはや見えないところで歌つてゐる
あたし達は
あたし達の歌聲に耳を傾ける
あたし達の歌聲が　あたし達を呼ぶのを聞く
あたし達は　津波になつて　愛するひとへ押し寄せてゆく

聖歌隊

未來の子供達が　あなた達を待つてゐる
未來の子供達が　列をつくり　手をさし伸ばして　空氣の窓をあけ　見えない窓に向つて前
　進する
暗い日の　風のなかに棲んでゐるもの出て來い！
あなた達　聖歌隊が近づいて來る！
聖歌隊の歌と　聖歌隊の足音とが近づいて來る！
綠の沼の　月に泳ぐすべてのもの出て來い！
あなた達聖歌隊は　あなた達を待たなければならない日に　あなた達を待つてゐる　この世
　の世界に近づいて來る

あなた達は　極限の上に昇る光の　縱橫な手のなかに　制約された聖歌隊となつて近づいて
　來る

未來の子供達が　未來の街々に充滿し　あなた達を待つてゐる
未來の子供達が　未知なる花を振り翳し　その近づき迫る　創造の聖なる祭日に　あなた達
　の歌を歌ふ
かつて　あなた達は　吹雪のなかを走つていつた　空氣の結晶を嚙んで　白い虹の上を傾き
　つゝ走つていつた
だから　あなた達は透明なのである
かつて　あなた達は　氷にして　火であつたところの　あなた達自らであつたところのあな
　た達が　あなた達自らでなかつたところの　拍擊のなかを走つていつた
だから　あなた達は光輝なのである
かつて　あなた達は　あなた達の肉體に鑿を打ち込み　あなた達をそこで顚倒させたところ

の　悪魔の子等の　地獄の淵を走つていつた
だから　あなた達は多彩なのである
かつて　あなた達は　あなた達の恐怖を　人類の車體骨に生みつけて　あなた達の知らない
　恐怖のそとへ走つていつた　なんにも見えないところへ走つていつた
だから　あなた達は歸つて來るのである
あなた達　聖歌隊の歌と　聖歌隊の足音とが近づいて來る
あなた達聖歌隊は　彗星の尾に乘る　空の綠を飛び拔けて　夜を日に次いで　待望の胸に向
　つて落ちて來る
雨の國の　涙のなかに棲む悪魔の子等よ出て來い！

未來の子供達が　あなた達を待つてゐる
死者の街々は　死者の街々の窓を開き　その震動のなかに死者の窓を落す
音のない音のなかで　蠢めく幻影の子等よ出て來い！

あなた達聖歌隊は　あなた達によつて悪魔であるところの　あなた達によつてあなた達を盲
　目にしたところの　あなた達の裔なる悪魔の子等の　滿願の日の　滿願の瞳に合圖する
　あなた達が　あなた達に充滿するときに　あなた達の歌が　人類の夜明けを歌ふ
あなた達聖歌隊は　あなた達の肉體が　あなた達にとつて約束したところの　一切の謎に自
　騰しつゝ　あなた達のものであるこの世の世界に近づいて來る
あなた達は　手をあげて極北を拂ひ　黄色い風の吹くなかを　落ちながら　登りながら　走
　つていつた日の　遠い記憶に虹を懸け　空の使ひとなつて歸つて來る
あなた達　聖歌隊が近づいて來る！

未來の子供達が　あなた達を待つてゐる
未來の子供達が　あなた達を通り過ごさせないために　土に耳を當てて待つてゐる
あなた達の歌が　彼等の口に合唱する　その一番早いあなた達の訪れを迎へるために　彼等
　は彼等の口を開ける

あなた達の脚が　彼等の脚を借りる　その一番早いあなた達の前進を迎へるために　彼等は
　彼等の脚を揃へる
あらゆるものを喰ひ　あらゆるものを孕む　腹のなかから生れて來るもの出て來い！
颱風の眼のなかで　血の眞空を踏むものよ出て來い！
月の上に乘つた月から　月が落ち　日蝕を喰つた日蝕のなかから　日の輪が落ちる
鐵が　鐵の波となつて　鐵を截る　その截斷の津波のなかから　未來の子供達が　未來の歌
　を歌ふ
霧のなかを　霧とともに登り　雨のなかを雨とともに登り　未來の子供達が　あなた達聖歌
隊の歌を歌ふ

空と土との間に　空と土とが進んでゆく　未來の子供達が　未知なる花を振り翳して進んで
ゆく

聖歌隊　定價二圓(停)

昭和十五年十月二十五日　印刷
昭和十五年十一月一日　發行

著作者　中野秀人

發行者　花田清輝
東京市赤坂區溜池三〇番地

印刷者　武宮敏一
東京市牛込區揚場町八番地

印刷所　東京印刷所
東京市牛込區揚場町八番地

發行所　文化再出發の會
東京市赤坂區溜池三〇番地
電話赤坂(48)二〇七番／二〇〇七番
振替東京一五七九九六番

910
179

終